

## 序——「朝鮮隠し」のカラクリから抜け出す

金達寿キムダルスは日本の敗戦（解放）後に本格的に知的活動を始め、半世紀以上にわたり、日本社会と在日朝鮮人社会にまたがって活躍した。この間、一九七〇年前後を境に前半生を文学、後半生を古代日朝関係史という、全く異なる学問領域に身を置き、驚くべきことにその両方で大きな成果を挙げた。「在日朝鮮人文学」という文学ジャンルの確立や、「渡来人」の語の普及と定着は、彼の数多い業績の代表例である。芥川賞候補作になった二作品「玄海灘」（五二〜五三年）・「朴達の裁判」（五八年）をはじめとする彼の文学作品を、若い頃に愛読した方は少なくないだろう。古代史紀行『日本の中の朝鮮文化』シリーズ（七〇〜九一年）も、七二年に高松塚古墳から装飾壁画が発見されたのを契機とする古代史ブームの追い風に乗って非常によく読まれ、本を片手に地元の古代文化遺跡に出かけていった方が数多くいた。

これほど多方面に影響を与えた人物の知的活動の全体を、特定の領域や民族の枠組みに限定して理解することは不可能である。そこで私は金達寿自身の言葉を借りて、彼を、「日本と朝鮮、日本人と朝鮮人との関係を人間的なものにする」ことを生涯の課題とした在日朝鮮人知識人と捉えた。この視座から、文学活動と古代日朝関係史の研究に加え、在日朝鮮人組織や韓国・北朝鮮との関係の総体を、彼の生涯

に即して明らかにしたのが、拙著『金達寿とその時代』(二〇一六年)である。そこで描きだした彼の知的活動の足跡を簡単に述べると、次のようになる。

金達寿の知的活動は、日本人と朝鮮人との関係に対立的なものと捉え、朝鮮人に対する日本人の差別意識を是正することから始まった。しかし文学活動を通じて彼は、次第に両者を、何ものかに対立させられている関係と認識するようになった。さらに古代日朝関係史を研究する中で、古代における日本列島と朝鮮半島との関係を消去することで成立している〈帰化人史観〉の核心に、日本人の祖先である帰化人を、近現代の在日朝鮮人の祖先と規定して蔑視することで自らを貶めながら、その欺瞞に気づかない日本人の自己差別の構造を見出すにいたった。そこで彼は〈帰化人史観〉批判を通じて、日本人の自己差別の構造が、朝鮮半島からの渡来人が日本列島の各地に残した文化遺跡を大和朝廷に隷属した帰化人の遺物と読みかえる「朝鮮隠し」のカラクリと表裏一体の関係にあること、このカラクリが近現代の(在日)朝鮮人に対する日本人の文化的優位性や差別の意識を生みだしていることを暴き出し、両民族の関係を人間的なものにすることを目指した。

だが前著は、あくまでも金達寿個人の知的活動に重心を置いた論考だったため、学問領域や民族の壁を超えて広範囲に展開された彼の知的運動を支えた重要な〈場〉である雑誌や、二世世代以降の、帰国を前提とした生活から日本社会への定住を前提とした生活への変化に伴う権利要求の動きに対する金達寿たち一世世代の認識などには、ほとんど触れられなかった。また金達寿の私生活や交友関係も、ほぼ全て割愛せざるを得なかった。そこで本書では、前著で扱えなかった公的・私的な活動を集積して、今なお彼を覆っている膨大な虚飾や偏見を取り払い、等身大の彼の姿を描きだすことを目的とした。

朝鮮学校や在日朝鮮人に対する悪質なヘイト・スピーチが横行し、政治レベルでの日韓・日朝関係が悪化している現在、文学から古代日朝関係史へと活動領域を移動してまで「朝鮮隠し」のカラクリを暴くことに心血を注ぎ、両国・両民族の間に人間的な関係を回復させようと尽力した金達寿の仕事から学ぶところは大きいと考える。のみならず、「朝鮮隠し」は古代史研究だけの問題でも、(在日)コリアンだけに関わる問題でもない。たとえば近年、日本の各地に暮らす日外国人が増加したのに伴い、個々の日本人や地域のコミュニティが彼らをどう受け入れ、共に暮らすべきかが切実な話題にのぼるようになった。しかし考えるまでもなく、敗戦後に限っても、日本社会には六〇万人以上の在日朝鮮人が七〇年以上にわたって生活を営み、日本人は全国各地のコミュニティの中で彼らと共に暮らしてきたのである。その歴史を忘れて、日本人と在日外国人が共に生きる時代が新たに到来したと考えることこそ、現代の「朝鮮隠し」ではないだろうか。

植民地時代から現在まで、日本社会の中で(在日)朝鮮人はどのように暮らしてきたのか。また日本人は敗戦後、彼らとの関係の歴史から何を学んだのか。金達寿の生涯を辿った本書がこれらの課題について改めて考え、内なる「朝鮮隠し」のカラクリから抜け出すきっかけとなれば幸いである。